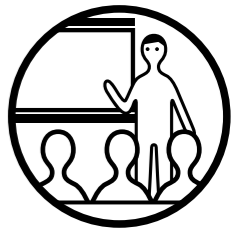


人材育成

世界に伝える 日本の教訓

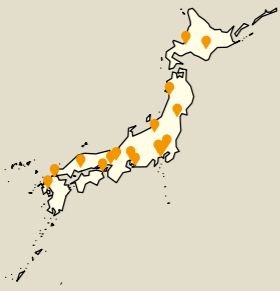
JICAと国内各地の大学の連携の下、途上国の未来と発展を支える人材が日本の近現代史を学んでいる。成功も課題もあった日本の経験が、途上国が成長するための教訓として期待されている。



「原爆の残酷さや恐ろしさを母国の人々にも伝えたい」との声が多く聞かれた現場視察。

日本の経験を伝える/ JICA開発大学院連携

大学とJICAが連携し、途上国の未来と発展を支える人材を日本の大学院に受け入れ、専門的な教育・研究の機会とともに、日本の近代化の経験と援助実施国としての知見を学ぶ機会を提供する。体系的な日本理解を母国の発展に役立ててもらおうとともに、彼らが担い手となって将来日本との良好な関係を築いてゆくことが期待されている。



「各大学におけるプログラム」を全国で提供中

留学を通じた
人材育成

日本についての
体系的な理解

途上国の発展
日本との
関係強化

近現代の日本の発展や開発を学ぶ

①「日本理解プログラム」

日本の近現代の発展や開発の歴史を広く伝える集中講義。JICA開発大学院連携が提供する「学び」の総論に位置づけられる。2018年度は、JICAの人材育成事業で来日し、日本の大学院で学んでいる研修員等（留学生）134名が参加した。

専門分野の日本の経験を学ぶ

②「各大学におけるプログラム」

JICA開発大学院連携の趣旨に賛同する国内各地の大学で、日本の開発経験を伝える授業科目を提供している。日本の学生が途上国の留学生と交流し、グローバルな視野を開ききっかけにもなる。



上：プログラム4日目、福沢諭吉を取り上げながら日本の近代化について講演した北岡伸一JICA理事長は「目の前のチャンスをつねに逃さなかった諭吉のように、明確な目標を持ち機敏に行動することが大事」と留学生を激励した。右上：JICAが今後どのように留学生との関係を発展させていくつもりかを尋ねるスーダンの留学生。右下：プログラムの総まとめはグループ発表。「21世紀における日本の国際的な役割」について討議する留学生たち。



日本理解プログラム 講師
政策研究大学院大学 准教授
アンドレア・プレッセーロさん

「日本は近代化の過程でさまざまな課題に遭遇し、成功も失敗も経験しました。そのとき日本がどう対処したのかを学ぶことは留学生の「思考の糧」となり、自国の発展や課題の解決を考えるときの助けになるはずです」

母国が紛争や復興のさなかにある留学生は彼にかぎらない。「ここがあの焼け野原と同じ場所だなんて」—— 帰りの車中、アフガニスタンから来ているある留学生は、にぎやかな市街の様子を見てそうつぶやいた。「広島は歴史は多く、そのことを教えてください。戦後の町づくりの根幹をなした都市計画や、政府が果たした役割についてさらに学びを深め、母国の人々にも伝えたいと思います」。車窓に映る町並みに、故郷の未来を重ね合わせているようだった。

「広島の人々にアメリカを恨む気持ちはないのでしょうか」。シリアから来たある留学生は、資料館の訪問後に開かれた戦後復興についての講義で、その疑問を口にした。母国では内戦が始まってから8年が経つ。「憎しみの連鎖を断たなければ戦争は終わらない」と危機感を募らせる彼は、資料館にアメリカに対する恨みを表わすような文言がなかったことに驚いたと話す。講師を務めた「ひろしま通訳・ガイド協会」の海生郁子さんは彼の疑問に「戦争の惨禍はすべての人類の過ち」だと答え、講義をこう締めくくった。「悲しみや憎しみを乗り越えて平和のために努力することに価値がある。母国に帰ったら原爆の実態を伝えてほしい」。

さまざまな問いを彼らに投げかけた。「広島の被爆体験に触れるものだった。被爆都市ヒロシマ」の歴史的な事実を留学生も知っていたが、原爆ドームや広島平和記念資料館で見た被爆直後の広島は、さ

「留学生たちに理解してもらいたいのは、今の日本がさまざまな出来事の上にあるということとです。明治期の改革や第2次世界大戦後の経済成長といった事例を正しく理解するためには、それ以前の日本に何が起ったのかを知る必要があります。歴史・政治・

「日本の近代化に重要な役割を果たした社会・経済的要因」をテーマに、青年たちが熱心に議論を交わしていた。論点は次々に挙がる。私塾や藩校などの教育機関、殖産興業政策、欧米からの技術供与や人的支援——とすると一般の日本人より日本の歴史に詳しい彼らは、JICAの人材育成事業で来日している途上国からの研修員等（以下、留学生）だ。ふだんは日本各地の大学院で研究生活を送っているが、「日本理解プログラム」に参加するため、5日間にわたって東広島市に滞在した。

参加している留学生はみな、日本に留学してから1年以上が経っている。来日したばかりの頃と違い、生活にも慣れてさまざまな疑問を持つ時期だ。そのタイミングでこのプログラムは、今の日本を理解する上で欠かせない歴史や政治、経済についての知識を教授する。プログラムの策定に関わり講師を務めるアンドレア・プレッセーロさんは、そのねらいを次のように話す。

平和と復興 広島が伝える

今回のプログラムの現場視察は、広島市の被爆体験に触れるものだった。被爆都市ヒロシマの歴史的な事実を留学生も知っていたが、原爆ドームや広島平和記念資料館で見た被爆直後の広島は、さ

「日本に留学して1年以上が経っている。来日したばかりの頃と違い、生活にも慣れてさまざまな疑問を持つ時期だ。そのタイミングでこのプログラムは、今の日本を理解する上で欠かせない歴史や政治、経済についての知識を教授する。プログラムの策定に関わり講師を務めるアンドレア・プレッセーロさんは、そのねらいを次のように話す。」

参加した留学生からは、「学校の普及が日本の近代化に大きな役割を果たしたことを知り、教育の重要性を再確認した」「かつての日本の公害対策は、母国のごみ問題を解決するヒントになる」「母国には健全なシヨナリズムが必要。尊王思想の議論に、自国の歴史や文化を再評価するのを感じた」「理系専攻で、もっと日本について学びたいと思っても機会がなかった。非常に有意義な経験だった」など、好意的な声が多く上がっていた。

経済が有機的に結びついて現代に続いていることが理解できるよう、講義で扱う題材は慎重に検討しました。包括的な日本理解を助けるため、特定のテーマを掘り下げるゲスト講演や現場視察の機会を用意し、プログラムの最後にはそれらのインプットをもとに、かつての政治的決断の代替案を考案するといった学びをサポートした。